

# 母の最期の10年を支えたピアニストの学び

～東京都世田谷区・米田ゆりさんと母ヨシさん～

NPO法人ハート・リング運動専務理事

早田 雅美

米田ゆりさんは、さまざまな音楽シーンで活躍しているピアニストです。1人っ子として生まれ、母の影響を受けて、物心ついたときにはピアノに触れていたということでした。

母のヨシさんは70歳代から老人性うつを患い、夫を亡くした88歳前後から側頭葉の脳委縮と認知症のような体調の変化が現れました。「初めての親の介護」という事態に、ストレスも多い音楽家の仕事をづけながらのゆりさんの奮闘がはじまります。

3回の入院を経て、ヨシさんを家に連れ戻して、2016年3月、97歳11カ月で最愛の母を送るまでの約10年間。そこには、家族だからこそその気づき、家



母ヨシさんとゆりさん

族だからこそその強い思いと、ときにはそのことがヨシさんの気持ちや体調をも好転させた、たかさんの学びが凝縮されています。

その一部を紹介します。

## 母と音楽と介護

母のヨシさんは、1918(大正7)年生まれ。恵まれた環境で育ち、小さい頃からピアノはお手のもの、若い頃にはショパンの難しい曲も普通に弾きこなせるプロ顔負けの腕前だったといえます。1人娘として生まれたゆりさんにピアノを勧めたのも当然

り前のことだったのかもしれませんが。

「仮面うつ」を患ったヨシさんは、毎日「寂しさ」を訴え、腹痛も訴えましたが、病院でいくらか検査しても「異常なし」。「誰もこの辛さをわかってくれない」と病院不信と引きこもりが進み、家で寝てばかりいる状態がつかまりました。ヨシさんにとっても、とても不本意な状況でした。

訪問看護師がプログラムした「体操」も拒否。部屋にあるピアノの話となったことをきっかけにヨシさんが昔ピアノに堪能だったことを聞き出した訪問看護師が機転を利かせます。

「ヨシさん、やさしい曲でいいから私にピアノを教えて」という声掛けに、ヨシさんはベッドから起き上がり、なんと50年ぶりにピアノを弾きはじめたそうです。

この声掛けがもし「ピアノを聞かせて」だったら、プライドの高いヨシさんは、昔のように上手に弾けないことを気にして決して鍵盤に向かおうとはしなかったはず。そのことに気づいたゆりさんは、その日以来母の弾く指一本の童謡のようなメロディに即興でゴージャスな伴奏をつけるようにしたそうです。「きれいな音、いいですね」というご満悦なヨシさん。「ピアノを弾く」ことが介護のためのプログラムにも組み込まれました。

一方、その逆の事態が週2回通っていたデイホームで起こります。デイホームにあったピアノに向かうヨシさんを職員が「すごい！ 大したもんだ！」と



母もピアノが大好き

やたらにほめちぎる。今はこんな稚拙な演奏しかできなくなっ  
てしまった自分を自覚しているヨシさん  
にとつて、その言葉はある意味プライドを傷つけられること  
だったのです。

「もう人前で弾かない」、そういうヨシさんの言葉から、介護者はよく家族や本人からバックグラウンドを聞いて、空振りしないようにことにあたるべきだ  
という思いを強くしたといえます。

## 母の「徘徊」「暴力」

ヨシさんがまだなにかにつかまってようやく歩く  
ことができていた頃、いわゆる「徘徊」が出現しました。  
ある朝、早朝4時半にはベッドにいる母の姿を確  
認していたのですが、ヨシさんはその後玄関でなに  
やら人の話し声が聞こえてきて驚いて目を覚ました  
そうです。パジャマ姿でよろよろと家を出てしまっ  
たヨシさんを見ず知らずの人が抱え込むように玄関  
まで連れ帰ってきてくれたのです。肝を冷やした  
ヨシさんでしたが、「あたし大丈夫よ」というヨシさ  
んの言葉には一層不安が増しました。

その頃からデイホームでも家でも、ヨシさんによ

る「暴力」と「大声」がエスカレートするようになりま

す。机をばんばん叩くことや、ときには職員もヨシ  
さんの平手打ちを受けることも。トイレ介助をして  
いても、肘鉄、つねる、髪をつかんでひっぱるなど。

一方でデイホーム帰りにヨシさんの出迎えを受け  
ると、「ゆりちゃんだ！ うれしい！ うれしいよ  
〜」と無邪気に喜ぶヨシさん。訪問診療医は、ヨシさ  
んの「暴力」をコミュニケーションの手段としてのも  
ので、思うように言葉がでない、気持ち伝わらな  
い、寂しい、不安、わかってほしい、もつとかまってほ  
しいというメッセージだと説明します。

不憫だなぁと母を見つめているベッドサイドで  
は、ケアマネジャーが「そろそろ在宅は限界ですか  
ね」などと母にも十分聞こえる距離で話したり、「お  
むつ」「おむつ」と連発したり、介護を受ける人にも自  
負心やプライドがあることに對して、気がまわらな  
い人の言動に無性に腹が立ったといえます。

## 急性期病院への入院

### 〜咀嚼・嚥下障害を巡る悪戦苦闘の3年半〜

2012(平成24)年、ヨシさんは転倒して大腿骨  
頸部を骨折、救急車で近くの急性期病院に入院とな  
りました。その後も亡くなるまでの3年半に2回の  
誤嚥性肺炎でも入院。入院中のヨシさんの様子を親  
戚に伝えたメールをもとに、ヨシさんの感じた思い  
を一部紹介します。

...

## ●骨折の手術を終えた後のことです。

「バカバカ」と、聴診器をあてていたドクターに抵  
抗する母。大声・暴力が出るため、個室に移されたも  
の、話しかけられる頻度が少ないせいか、朝、会い  
に行くのとボーっと寝ていてろくに会話もできない  
状態。

朝食も1人では食べられないのですが、病院のス  
タッフは皆忙しく、その忙しない介助では口を開けま  
せん。私がいろいろ話しながら朝食介助をする  
と、だんだん顔に精気が戻ってきて食べてくれます。

山のような大量のおかゆが母の前に出されます。  
私でさえ食欲がわかないような味つけの病院食で  
す。高血圧、高血糖、高血糖と検査で指摘されて  
いるので仕方はないなと思いましたが、頻繁に入れ  
替わる看護師に何度相談しても『先生に聞いてみま  
す』のまま、もう何日も過ぎてしまいました。

毎朝、朝食の7時半には病院へ行って、こっそりう  
ちから持ってきた梅干や佃煮、入院前は家で毎朝食  
べていたバナナの輪切りなどを勧めると、母はそれ  
だけはなんとか食べてくれます。

今さら高血圧だの血糖値だの、と目くらまら立てて、  
あげく食欲ゼロになるよりは、おいしく食べて体力  
つけなきゃ、と私は思っています。

朝だけでなく、仕事帰りには21時の消灯までに必  
ず病院に寄るようにしています。知り合いからは「お

母さん入院したから、自由になつて楽でしょう?」といわれましたが、ご飯のたびに丁寧な介助が必要、頭を冷やすはずの水囊ひんやうがずり下がって肩を冷やしたままになつている、掛布団の縦横が逆さになつて足が冷え切つていた、などと看護師やスタッフの手がまわつていない細かな状況を話しても仕方がないので「うんうん」といつておきました。

### ●嚥下障害が突然はじまりました。

注射、血圧測定、着替え、全身清拭、「いきなり部屋に入つてきて痛いことをされる」と母は認識しているようです。

そのため、母は看護師に恐怖と不安を持っている様子。ひつかいたり、叩いたり、反撃をしてしまいました。そうした行動を抑え込む目的の向精神薬が追加されましたが、その後、食べたいのに飲み込めないという嚥下障害? が発生しました。

やわらかいゼリー食のようなものを出しても、逆に嚙まなくてよいから、全然嚙まずに飲み込めもしない。私は母が「食べたい」と思っていることはすぐわかり、むしろ卵ボーロのようなカリカリとできるものを試してみると上手に嚙んで「ごっくん」してくれます。

ある日仕事を早く切り上げて病院へ行くと、食後の薬を飲み込まない母に、看護師とヘルパーが、「ごっくんできないとまた点滴だよ、先生に頼んでうんと痛い点滴してもらおうよ」と脅しにかかつてい



亡くなる10日前 好物のアスパラを箸で食べていた

る。母は口に水が入つたままベッドの枠をばんばん叩いて反撃中でした。看護師にはこれまた「暴力」と映つたようです。見かねて「あとは私がやりますから」とバトンタッチ。

母を落ちつかせてから、「おやつにしようか」「うん!」。食べずに吐き出したものもありましたが、パイヤ5切れ、卵ボーロ半袋、リンゴジュース「おちょこ」2杯を楽しく食べてくれました。

昨日からは右手首が腫れあがり、熱をもち体温も37.5度に上昇。このままでは大腿骨の治療以外のことで退院できなくなりそうです。

誤嚥性肺炎で入院してまもなく2カ月になりました。朝病院へ行くと、かわいそうな格好で寝かせられていたのを直すところからはじめます。

胸より頭が下がつてしまつている、胸がはだけて寒そう、入れ歯を外せば口中痰がびっしり。口の中をきれいにしあげ、化粧水と唇のひび割れにリップクリームをつけてあげると母はやつと落ち着いてにつこり。

私に「いつもいてくれなきゃだめなの」といいます。食事はというと、(あれほどこの病院食は食べられないといっているのに)ルール通り? の、トロト

口にミキサーにかけたおかゆや高カロリードリンクが出て、母は飲み込めずそのうち口角から「たらり」とこぼしてしまうか、口の中にためたまま寝てしまふ。なにか病院にバカにされている気さえしてきます。

……

嚥下障害が進めば進むほど、病院食はゼリー状、ミキサー食など嚙まなくてよい柔らかい形状の食事と変わつていき、ヨシさんは一層飲み込めない状態に陥りました。主治医や看護師にいくら説明を試みても「病気の嚥下障害ではなさそうですね」で、対応に変化はなし。

ヨシさんの「食べたい」という希望を勘案しながら、ゆりさんが母の食べられるものを見つけたといえます。このように、患者さんや入所者の「食べたい」という気持ちに、リスクと背中あわせでご家族が奔走するという例は米田さんばかりではありません。

医療や介護の現場では、未だ摂食嚥下障害に対する個別の専門的評価とポジティブな対応が普及していないという現実があり、「食べる」という生きがいへの一層の理解が必要です。

最後の退院でわが家に戻ったとき、ゆりさんがかけたシヨパンのCDに、ヨシさんは安心したように笑顔をみせたといえます。亡くなる数日前「長生きするつてとても大変、でもやりたいの」と話したヨシさん。黙つてゆりさんに顔をすりつけて、その眼には温かい涙がたまっていました。